

氏 名	齋 藤 一 雄 さい どう かず お
学 位 の 種 類	農 学 博 士
学 位 記 番 号	論 農 博 第 547 号
学位授与の日付	昭 和 50 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	自然の保全原単位としての水系環境系に関する研究

論文調査委員 (主 査)
教 授 四手井綱英 教 授 武居有恒 教 授 西 口 猛

論 文 内 容 の 要 旨

自然の保全とレクリエーション利用との調和を目的とした地域計画が、最近各地で論議されるようになった。

本論文は自然の保全に関する従来の造園学的基础に環境系という、生物生態系、人間社会の生活系および地理学的な自然のシステムなどを総合した新しい概念を加えて、自然の保全原単位として水系環境系という概念を採用し、それを実際の保全設計に適用して検討を加えて、その妥当性を立証したものである。

論文概要は下記の通りである。

1. 日本の造園型は古来山水型であって、その一部に草地をふくむとしても、ヨーロッパの草地型造園とは本質的に異なる。この山水型式は日本の造園に関し歴史的にもその底流として、一貫して継承されてきている。そして、現在の日本人の一般的な生活環境としても、この山水型が存在しているから国土や地域の自然の保全やレクリエーション利用にも水系が原単位として採用されるべきである。これを水系環境系と名付ける。

2. 造園の主体的立場としては水系環境系を自然科学的、社会科学的に裏付ける必要があるが、特に生態的、心理的空間として把握することが強調される。

造園技術上は基本的空間として、かこわれた空間（よどみ）、はさまれた空間（ながれ）、ひらかれた空間（ひらけ）の3類型があげられる。

またこれらの類型を総合して、人が行動の手がかりとする空間という意味から依拠空間と名付け、これを不安定にする要素を不安定要素、不安定化された空間を不安定空間と名付ける。

水系環境系をこれらの基本的空間の類型を用いて解析することにより、自然の保全やレクリエーションの利用が可能になる。

3. 以上の基礎概念を陸と海の自然の保全計画やレクリエーション利用に適用し、原単位としての水系

環境系、空間の類別が、重要な手法として活用出来る。

しかし、海の空間は陸のそれとは著しく異なる。海そのものには安定した依拠空間は存在しないが、海陸の接点である海岸は依拠空間に富んでいる。それ故海陸を結ぶ持続的なレクリエーション環境系を成立せしめるためには、水系環境系を原単位とした海岸の生態系の配列を尊重する必要がある。

また海中景観の特質として、透視距離の短い完結空間と継続体験空間および複合体験空間があり、これをシステム化する必要がある。そのためには陸から海に至る各施設の段階的配列系の形成のほか、基礎的に新しい空間に対応する教育や政策が考慮されねばならない。

4. 具体的な例として適度の規模をもつ能登半島をえらび、具体的に水系環境系を区分し、人工地帯、集落率などを計量したところ、それらの間に極めて高い相関があること、水系区分が自然度などともよく合致することがわかり、水系環境系という概念が自然の保全、レクリエーション利用などの計画に具体的に適用出来ることが立証された。

論文審査の結果の要旨

近年わが国の経済高度成長にともなって発生した公害を契機として、自然環境の保全の重要性が広く認識され、各地で自然の保全計画が立案、実行されるようになってきた。

本論文は自然保全における造園学的考察に、生態学的な環境系という概念を導入し、水系を中軸とする環境系原単位を想定して、その系の成立について、造園技術的、生態学的考察を加え、自然の保全計画のための原単位として適用しうるか否かについて、具体的な例をあげて研究した成果である。

その学術上の意義は次の5項目に要約されよう。

1. 造園技術に環境系の概念を新らしく導入したこと、2. 水系環境系の造園技術的表現として、山水の庭と地域計画としての国土の水系を中心としたモザイクシステムとを原単位として統一し、その相関を技術的に解明したこと。3. 造園空間を安定型と不安定型に類別し、新たに基本的類型を設定し、空間解析を保全計画、設計に導入したこと。4. 海中公園の基礎として、景観とレクリエーション行動との関連性を解析し、その構造を明らかにしたこと。5. 以上を通じて、水系環境系が自然の保全計画の原単位として採用しうる根拠を明らかにし、水系環境系による保全計画の手法をはじめて具体的に提示したことである。

以上のことは何れも従来考えられなかった新しい考察であって、なお多くの論議が必要であるとしても、これからのわが国、各地の自然保全計画やレクリエーション計画の作成にあたり、多くの新しい示唆を与え、計画の重要な基礎を創造したものであって、造園学に寄与するところがすこぶる大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。